

# 令和5年度第1回栃木県総合教育会議

## 議事録

日 時 令和5年7月20日（木曜日）  
午後3時00分から午後4時30分まで

会 場 公館中会議室

出席者	教育長	阿久澤	真理
	教育委員	板橋	信行
	教育委員	鈴木	純美子
	教育委員	金子	達也
	教育委員	永島	朋子
	知事	福田	富一

## 1. 開会

○司会 定刻となりましたので、これより令和5年度第1回栃木県総合教育会議を開催します。

当会議は、県総合教育会議設置要綱第5条に基づき、公開で行うこととなっておりますので、御了承願います。

なお、陣内委員におかれましては、本日所用により欠席となっておりますので、御報告申し上げます。

## 2. 挨拶

○司会 では初めに、福田知事より御挨拶いたします。

○福田知事 皆様、こんにちは。

御多忙の中、教育委員会の皆様方には、今年度初の栃木県総合教育会議に御出席いただきまして、誠にありがとうございます。

また、永島委員とは、初顔合わせになりますけれども、どうぞよろしく願いいたします。皆様方には、日頃から本県の教育施策の推進に多大なる御尽力をいただいておりますことに、改めて御礼と感謝を申し上げます。

さて、教育をめぐる社会の状況につきましては、新型コロナウイルス感染症の影響や、急速な情報化、グローバル化の進展によりまして大きく変化をし、先を見通すことがますます困難な時代となっております。

こうした中、総合教育会議では、昨年度から「とちぎの未来の教育について」を議題としまして、栃木県教育大綱における10項目の「施策の方向」を取り上げ、皆様方と意見交換を行っているところでございます。

昨年度は、「教育の基盤の充実」と「スポーツ・文化の振興と生涯学習の推進」について、貴重なご意見をいただいたところでございます。改めて御礼を申し上げます。

本日の会議につきましても、施策の方向の中から2項目を取り上げまして、とちぎの未来の教育について、10年後、20年後を見据えながら、皆様方と幅広く、率直な意見交換をしてみたいと考えておりますので、どうぞよろしく願い申し上げます、開会に当たっての挨拶いたします。

## 3. 議題

### とちぎの未来の教育について

○司会 それでは、これより議事に入ります。

ここからの議事の進行は本会議の招集者である福田知事にお願いします。

○福田知事 それでは、議事を進めてまいります。

今回は、教育大綱の「施策の方向5 自分の生き方を考える教育の充実」及び「施策の方向9 高度な知識・技術、多様な文化に触れる教育の充実」について意見交換を行って参りたいと思っておりますので、よろしく申し上げます。

まず、事務局から説明をお願いします。

○事務局 御説明いたします。資料を御覧ください。

本資料は、教育大綱から抜粋した内容でございます。

教育大綱でございますが、本県の教育、文化等の振興に関する総合的な施策について、その目

標や施策の根本となる方針を定めるものであり、3つの基本目標を設定し、施策の方向10項目と施策の方向プラスを定めております。

まず資料の左側を御覧ください。基本目標2とありますが、人との関わりを通して生き方についての考えを深めることによって自分の未来を創る力を育むとする、この基本目標2の中に今回取り上げます「自分の生き方を考える教育の充実」は、位置づけられております。

その内容は、中ほどの囲みにありますとおり、家族や所属する集団、地域社会における多様な人々との関わりの中で、自分を知り、生き方についての考え方を深め、自分の将来を自ら考えることのできる教育を推進する、としております。

主な取組として、キャリア教育・職業教育の推進が挙げられておりますが、これは、例えば、学校と企業等が連携して取り組む「キャリア形成支援事業」や「インターンシップ推進事業」、「高校生未来の職業人育成事業」などがございまして、この後、担当課から詳細について御説明いたします。

次に、「「じぶん未来学」など高校生が自分の生き方を主体的に学び考える学習の推進」では、「とちぎの高校生「じぶん未来学」推進事業」において、高校生が、親や家族、家庭の意義や役割に加え、地域の間人関係など地域社会について主体的に学ぶ、「じぶん未来学」プログラムを実施しております。

それから、自己指導能力を育むための教育相談・支援体制の充実ですが、これは、自己指導能力の育成に向けて、学びに向かう集団づくりと、子供が意欲的に取り組む授業づくりを相互に関連させながら、社会性と確かな学力の育成を目指す学業指導を推進しているところでございます。

次に、資料の右側、「高度な知識・技術、多様な文化に触れる教育の充実」についてでございますが、これは、豊かな学びの機会を通して描く未来の可能性を広げることによって、一人ひとりの夢や志を育むとする、基本目標3の中に位置づけられております。

中ほどの囲みにありますとおり、情報化や国際化など急速に変化する社会において、グローバル化に対応できる人材や地域を担う人材を育成するために、より高度な知識や最新の技術、多様な文化に触れる機会の充実を図り、子供たちの視野を広げ、挑戦意欲を引き出す教育を推進する、としております。

主な取組としては、高校と大学・研究機関等の連携による高度な学びの機会の充実が挙げられておりますが、これは、高校が大学や自治体、企業等と連携協定を締結し、高度な学びの充実に取り組んでおります。

次の主な取組、「専門性の高い技術などに触れる学習機会等の提供」では、「とちぎ子どもの未来創造大学」など様々な分野において、高等教育機関や企業などと連携し、小学4年生から中学3年生を対象に体験講座を提供しております。

そして、企業における最先端の技術に触れる機会や、各産業分野の専門家から高度な知識・技術を学ぶ機会の提供では、「未来を創る高校生地域連携・協働推進事業」を実施しており、また、STEAM教育など教科横断的な学びの推進では、令和4年度から、「STEAM教育推進事業」をスタートさせました。これらにつきましても、この後、担当課から事業の詳細を御説明いたします。

教育大綱の施策の方向の5及び9についての説明は以上となります。

○高校教育課 それでは続きまして、今の説明のうち、いくつかの事業の概要について詳細を御説明いたします。資料を基に御説明申し上げます。

始めに、1 ページ上段になりますが、「施策5 自分の生き方を考える教育の充実」の関連施策についてでございます。主な事業について、3つ御説明をいたします。

なお、上段右の写真につきましては、福田知事がお座りになっている写真でございますが、こちらは、昨年度の1月11日から15日まで、佐野のイオンで開催されました栃木県フェアでのものになります。この後御説明いたします、「高校生未来の職業人育成事業」において、佐野松桜高校の生徒がドラム缶を再利用して製作した椅子、こちらの方に知事が座っていらっしゃいます。

それでは、1 ページ下段を御覧ください。「キャリア形成支援事業」についてです。こちらは専門的な知識技術の習得や、社会における自分の役割やあり方、生き方について考える機会を生徒たちに提供することを目的として、各学校の実情に合わせて、企業、大学、地域等の外部人材を活用した講演会、模擬授業、現場見学や技術指導などを実施しております。令和4年度には、県立高校57校、特別支援学校3校で実施しました。

続きまして、2 ページ上段になります。「インターンシップ推進事業」は、社会的、職業的自立に向けた基盤的な能力や態度を育成するとともに、勤労観、職業観や、進路選択への積極性を醸成することを目的として、企業等における就業体験を実施しております。産業系の専門学科の生徒を中心として、普通科の希望生徒とも合わせて、令和4年度には27校、76学科3,448名の生徒が実施をしております。写真は、左から機械加工、成分分析、測定の様子を撮影しているものでございます。

続いて、2 ページ下段となります。「高校生未来の職業人育成事業」でございます。こちらは、生徒の職業意識や自己有用感等を育み、主体的かつ協働的に行動できる未来の職業人を育成することを目的として実施しております。本事業は 栃木県産業教育振興会への委託事業として行っており、会員企業による技術指導などを受けながら、高校生の主体的な企画立案による実践的な活動を実施するものです。令和4年度には、11校が実施いたしました。企業等から指導を受けた後に、生徒たちはその学んだ内容を生かして地域に貢献するという取組も行うセットとなった事業で、これを通して生徒たちは、学習意欲や職業意識また自己有用感を高めるような取組となっております。

続きまして、3 ページ上段、「施策9 高度な知識・技術、多様な文化に触れる教育の充実」でございます。ここでは、下にあります2つの事業について御説明を申し上げます。下段になります。「未来を創る高校生地域連携・協働推進事業」につきましては、学校と地域が連携協働した取組を通して、地域に対する課題意識や貢献意識を高め、将来、地域を支えることのできる人材を育成することを目的として実施しています。令和2年度から6年度までの事業期間の中で、合計12校が、それぞれ3年間の研究指定を受けて、取り組んでおります。写真の「いちごまんじゅう」は、鹿沼商工高校が開発した商品でございます。

また、資料に写真はございませんが、鹿沼南高校では鹿沼シウマイ、さつき、などの商品やブランドの開発、また、烏山高校や益子芳星高校などの地元PRや町おこし活動など、学校と地域が連携協働し、地域の課題を解決する取組を行いました。

続きまして、次の「STEAM教育推進事業」でございます。STEAM教育は、科学、技術、工学、アート、数学の英語の頭文字をとって名付けられた、学問分野を横断した探究的な学習を

充実させ、実社会に通用する生徒の課題発見、解決能力などを育成することを目的とした事業で、モデル校による実証研究及び成果の普及、また情報共有のためのプラットフォーム、ウェブサイトの構築を行っております。なお、モデル校としましては、宇都宮北高校、栃木女子高校、真岡高校、黒磯高校の4校を指定しまして、令和4年度には、写真にありますような4校での合同講座を始めとしまして、モデル校の実情に合わせまして、教員研修や生徒研修、また学校によってはオーストラリアの高校生と、オンラインでの交流活動などを実施いたしました。なお、先程4校合同での研修と申し上げましたが、今年度につきましても、来月の8月3日に、チサンホテルにおきまして「STEAM 体験 DoCAMP」と称して、本田技研の方と北陸大学の方を講師として招いて、4校での合同の研修を実施する予定でございます。

また、この他、資料にはございませんが国の事業といたしまして、生徒達に理科や数学に関する高度な学びを体験させる「スーパーサイエンスハイスクール」事業なども実施しており、こちらは現在、栃木高校と大田原高校が、国からの指定を受けて実施をしております。

最後、結びとなりますが、4ページ下段で成果と課題をまとめております。これらの取組につきましては、学校にとっては地域や社会とともに高校生を育てる機会となっており、このことは、国の示す学習指導要領における社会に開かれた教育課程の基本理念を実現するものとなっております。また、生徒にとっては実社会を垣間見たり、疑似体験したりする活動を通して、記載にございますように、教室の中だけでは決して得ることのできない貴重な学びを行う機会ともなっております。一方、課題としましては、研究校やモデル校事業において実践され得られた成果を、各学校に普及させていくことや、事業期間終了後も継続できるような自走化の仕組みを構築することが重要と考えております。そして何よりも、こうした取組が一過性のイベントで終わらないよう、日頃からのキャリア教育、進路指導を充実させると共に、各教科の授業の中でも生徒たちに社会とのつながりを意識させる指導を行うことが重要と考えております。

説明は以上となります。

○福田知事 ありがとうございます。

ただ今、事務局から教育大綱の概要とその関連事業について説明がありました。

それでは、まず、「施策の方向5 自分の生き方を考える教育の充実」について、委員の皆様から御意見をいただきたいと思っておりますので、よろしく申し上げます。

板橋委員からお願いします。

○板橋委員 御説明ありがとうございます。

まさに、成果と課題でお話いただいたところではないかと思いますが、私も同様なことを感じております。この「キャリア形成支援事業」や「インターンシップ推進事業」を含めて、色々な取組をされているというのはしっかりと感じているところですが、課題というところにも出ていますが、モデル校などは進んでいると思うのですけれども、それが全ての学校に日常的に根付いているのだろうかとか、継続的な取組になっているのだろうかというところは、疑問なところがございますので、これをしっかりと根付かせることが一番大事なことだと思います。

最近、そういうことはないかもしれませんが、今から4、5年前に、やはり、ある団体でキャリア教育を高校生に実施したいというようなことで、各学校にお願いに行った際に、ある普通科高校から、わずか1時限2時限の時間も取れないという話がありました。受験勉強でも自分の生き方は考えられると思いますが、受験勉強に時間を取られ、自分の生き方を考える教育のた

めの時間が不足しているところがあるのではないかと強く感じました。

総合的な探究の時間のような時間がありますけれども、ここにありますとおり、そういった実業家の講演会を聞いてもらったり、さらにその上でインターンシップや企業研究を一連のカリキュラムにしたりすることで、全ての学校がある程度時間が取れるような、そういった取組をしていただければと思った次第です。

できれば、我々実業家や著名な人に来てもらうというのも1つありますが、卒業して大学に進学した、もしくはその先の企業に就職した人など、先輩にも協力していただいて、学校で話してもらい機会を増やしていただくと、生徒もまた違った興味を持てるでしょうし、卒業した方が、栃木県から東京の大学に行った場合になかなか地元に戻ってこないというような課題もありますので、そのような課題を解決し、地元のPRにも役立つのかなと思います。

以上です。

○福田知事 ありがとうございます。

では、金子委員。

○金子委員 今、御説明をいただいた中で、施策5の中に、「キャリア形成支援事業」、「インターンシップ推進事業」、「高校生未来の職業人育成事業」がありましたけれども、御説明の中では、やはりどちらかというところと産業系の高校の生徒が対象になるのだろうと見させていただきました。また、先ほど板橋委員からもありましたが、例えば、普通科を進学した生徒が大学に進学し、地元に戻ってこない、行きっぱなしになってしまうというケースも多く見られるのだろうと私も理解をしています。

私は、別の視点なのですが、この施策5の「自分の生き方を考える教育の充実」の中の冒頭の、「地域社会における多様な人々との関わりの中で」というところの視点で、話したいと思います。先日、私の地元で、私がPTA会長をさせていただいた中学校の校長先生、教頭先生、歴代のPTA会長との意見交換がありました。その中学校では、中学校とその中学校区にある小学生を対象に、サミット会議というものをやっています。子供たちが、地域の人と交えたテーブルで、様々な地域の課題を話し合い、自分たちに何ができるのかということ、話し合い、決定したことを行動に移すという事業を、数年続けています。コロナで授業や修学旅行ができなくなった時には、中学校と小学校の校庭で花火を上げたという事業がありました。何が言いたいかというと、子供たちはどのように参画して、自分たちがどうやってここで生きているのか、どういう立場なのか考え、この地域社会に参加する中で、自分の心や人生をどうやって豊かにしていくことに繋がるのだろうなと思いました。

ただ、自治会の加入率が減少し、その保護者世代は、その地域の大人の関係が希薄化して中々人付き合いができなくなる中で面白いことがあったのですが、子供たちは、朝の地域のゴミ拾いに一緒に出ようと発案し、中学生がそのゴミ拾い作業に参画をすると、当然、大人も見えないふりはできませんので、大人も参加するようになるという事例もありました。

また、子供たちが、地域のお祭りに率先して参加し、地元の祭りのブースで中学生、小学生が、自分たちが企画した物品を販売したりすることで、地域への参画を繰り返して行っています。今年はコロナが開けたので、地域の事業が再開するということになりましたので、中学生、小学生が、コロナ前のように地域に参画して行きたいなどとサミットの中で話していました。

ただ、その中で、中学校を卒業すると、高校によっては、そういった地域と関わりを持つ機会がなくなってしまうということが課題なのだということも話していました。

職業系の高校生の場合はインターンシップや職業体験を行う生徒もいますが、それ以外の高校では、中々そういう機会に恵まれないということで、できるならば、ぜひ高校生や大学生になっても、中学校まで活動してきた地域の活動に参加できるような機会を高校と中学校が連携をして、年に一回でも、夏休み期間でもよいのですが、そういった機会を継続して設けていくことによって、高校生も自分と地域のつながりの意識を持つでしょうし、またそれを受けた中学生、小学生も、その高校生や先輩方から学ぶこともあるでしょう。そうすると、良い循環が生まれてくる。そして、最終的には地域への帰属意識だったり、郷土愛だったり、そういったものにつながるのではないかと思います。ぜひ、今高校の中だけに留まるのではなくて、いかに中学生や地域との接点というものを少し意識して活動すると、より良い広がりのある活動になるのではないかなという視点に立って話をさせていただきました。

○福田知事 板橋議員からは、キャリア教育について普通科高校では時間が足りません、ということで、残念ながらそういう機会が持てないのではないかという意見をいただきました。金子委員からは、小、中学生は、地域の行事に色々と参加するけれども高校生は残念ながら姿が見えないので、その連携を考えた方がよいのではないかというご意見をいただきました。

では鈴木委員お願いします。

○鈴木委員 私からは、就業体験ということで、特別支援学校の就業体験を見てきたのですが、特別支援学校では、一般企業への就業体験は、障害の程度が軽い子供たちが行うのですが、体験に行く前の壮行会では、こういうことを頑張ってきますと立派に発表して、終了後の報告会で、反省点や次への課題などを発表する場があります。

生徒たちを受け入れてくれる企業を探すのは、先生の努力になりますが、そのおかげで生徒たちは色々な所に行って体験することができています。

学生のうちに仕事の厳しさを知ったりすることで、卒業後に就職して、そこで心が折れてしまうことでの離職を防ぐことができているのは、より良いことだと思います。これはずっと昔から特別支援学校で行われていることなので、先生たちの努力にかかっていますが、これからも協力してくれる企業をつなぎ止めておくことがとても大切ですので、教育委員会としても、支援をお願いしたいと思います。

特別支援学校はそういった形で就業体験がきちんと出来ているのですが、うちの娘は普通科の高校ですが、普通科高校では、就業体験というのがありません。受験勉強が忙しいというものもありますし、コロナというものもあったのですけれども、どちらかというどの大学に進学するか調べることに力を入れていて、福島県に行って、どの大学でどのようなことが勉強できるかを複数の大学から聞いた経験が、が、とても楽しかったと話しておりました。小、中学校では地元の企業や幼稚園や小学校などに1週間程度、子供が体験に行きますと、とても楽しんで帰ってきますので、これからもそういったことは続けていただきたいと思いますし、コロナでそういった活動が止まってしまいましたが、これからはもう少し出来たら数を増やして、良い体験ができたかなと感じております。

私からは以上です。

○福田知事 ありがとうございます。

今、鈴木委員から言われた、福島で様々な大学の説明が1か所で受けられるということですか。

○鈴木委員 そうです。色々な大学の合同説明会があるというものです。

○福田知事 それは、栃木県では行っていないのですか。福島県の取組はどのようなものか、どこが

違うのかを教えてください。

それから市町は、体験学習やチャレンジウィークなど名前をつけて行っていると思いますが、全市町で取り組んでいますか。

○事務局 体験学習やチャレンジウィークは全ての学校で取り組んでいます。コロナで実施出来なかったところもありますが。

○事務局 鈴木委員がおっしゃったものは、業者が企画し、いろいろな大学を集めて、たまたま福島の大学を会場に、近隣の県に声をかけて集めて行ったものだと思います。

おそらく福島県の取組というよりは、業者が福島を会場に行ったということだと思います。

○福田知事 参加した方が行って良かったという人がたくさんいるということは良い取組だと思います。

それでは、永島委員をお願いします。

○永島委員 私も、小、中、高等学校それぞれにおける就業体験活動を推進すること、さらに中学生の職場体験は非常に意味があることだと思います。

しかしながら、地域差がよく出てしまう問題でもあると思っております。宇都宮の場合は体験できる場所が数多くあると思いますが、過疎地域になりますと、体験できる企業が限られてきてしまうということも現実にございますので、それをどのようにカバーしていけるかなと思ったところでは。

「人との関わりを通して生き方についての考えを深めることによって自分の未来を創る力を育みます」とありますが、私たちは子供の居場所づくりに取り組んでいます、本当に子供たちの未来をつくる教育と子育て支援を一緒にできたらいいなと思っております。

昨日のことなのですが、居場所に来ている子供たちと、自分の夢について話す機会があったのですが、一人の子供が、「自分の夢はちっちゃいから話したくない。」と話していました。「夢に大きいも小さいもないよ、教えてくれていいよ。」と話したのですが、最後までその子は自分の夢を話してくれることはなかったのですが、この子が居場所に通うようになって、自分の夢を語ってくれるようになるまで支えていければいいなと思っております。

子供たちが、大きな声で、自分の夢を語れるような地域社会になればいいなと思っております。

その中で私たち大人が何ができるのか、やはりキャリア教育の中で、学ぶことの意味であったり、働くこと、生きることの尊さを実感出来るのかなと思いましたが、栃木県でもキャリア教育がより良く推進されると良いと思います。

質問ですが、キャリア教育をしてくれる企業はどのように開拓しているのか、ということと、他県では「キャリア教育支援協議会」という地域ぐるみでキャリア教育を支援してくれる取組があったので、そういったものが栃木県にもあるかをお聞きしたいです。

○福田知事 永島委員から質問がありましたので、事務局をお願いします。

○事務局 説明させていただきます。

産業系の高校等については、栃木県産業教育振興会に企業が700社以上、会員として加わっていただいておりますので、そういった企業を中心にお手伝いをいただくということがございます。

また、普通科高校が企業にという場合には、基本的には近隣の企業をお願いをしたり、あるいは他校が取り組んでいた情報を得て、企業に連絡を取るといったような形をとったりしております。先程申し上げた「STEAM教育推進事業」では、モデル校が企業の指導を受けるような機会を持ったりしているところですが、そうした情報を収集・整理して、先程の説明にありました



情報共有のためのプラットフォームに掲載し、他の学校でも情報が得られるようにしたいと考えております。以上になります。

○永島委員 学校単位で行うということでしょうか。

○事務局 はい、それぞれ学校の年間の計画の中に位置づけて実施をしています。

それから、インターンシップなどについては、地区協議会というものも立ち上がっておりまして、そこでは学校と企業とが話し合いをしながら、より良いインターンシップの実施に向けての検討などもしているという状況です。

○永島委員 ありがとうございます。

○福田知事 それでは、教育長お願いします。

○阿久澤教育長 それでは、私の意見を言う前に、今日欠席の陣内委員から、今日の発言についてのメモを預かっていますので、お配りもしていただくと同時に、ポイントを私の方から御説明をさせていただきたいと思います。

まず「5 自分の生き方を考える教育の充実」について陣内委員の意見としては、やはり自分の生き方を考えるという意味にあっては、まず他者との関わりを通して自分自身を理解し、そこから自分の生き方についての考えを深めて、自己の将来、自分の将来について考える意欲や力を育む、それが自分の生き方を考える教育になるのではないかと言う前提に立つと、他者との関わりをいかに教育という営みの中で、実現していくのか、そのシステムを整理していくことが重要だということです。例にも出ていますけれども、「じぶん未来学」であるとか、インターンシップや「キャリア形成支援事業」といったものが非常に重要になっていると思います、ということです。まず自分の身近なところの仕事についてしっかりと学ぶということが重要ではないかと思えます。

宮城県石巻市の例が載っていますが、子供たちが身近なところへ出向いて行って、周りの大人たちにインタビューをして、大人から様々なことを学んでいくという取組をしているということです。本県でも、大企業だけではなく、地元の中小企業であるとか、お店、NPO など、大人がそれぞれ日々頑張っているその姿を、ぜひ子供たちが、小学校、中学校、高校も含めてでしょうけれども、子供たちが地元で頑張っている大人に気づいたり、大人の仕事について触れる機会を作ったりするというのが、まず自分の未来を考える上で一つの大切なきっかけになるのではないかと、期待されていることでもあります。

それをやっていく上にあっては、振り返りがとても大切だと言うことで、まず他人の働き方や他人の暮らし、人生をしっかり観察というか、よく捉える中で、特に振り返りを行うことで、自己を見つめ直して気づきと学びを深め、自分の力として蓄えていくことができると思います。そういった意味では、こういった活動をする上では行ってきて終わりということではなくて、行ってきたものをいかに自分の中に取り込んで、そこから自分を見つめ直しているのか、そういうことを考えていくことが重要だと思えます、こういうご意見をいただいております。

それでは、この「自分の生き方を考える教育の充実」について、私の意見をお話させていただきたいと思えます。

まず、非常にこの数年、三年ほどコロナがあり、中々色々な所に出掛けて行くことができない三年間であったと思えます。ただ今年からそのような制約もなくなってきましたので、また新しい展開が図れるタイミングになってきたと思えます。

ただ、この三年間の中でいろいろ話を聞いてきますと、どうしても子供たちが内に籠もるとい

うか、外へ出て行くきっかけがなかったこともあって、他人との関係を築くのが苦手になっていると、そのような話も聞こえてくる場所でもあります。

そういった中で逆説的な話になるかもしれませんが、私としては、デジタルをうまく活用していく、一人一台のタブレットが整備されましたので、逆にデジタルというと、中に引き籠もってしまうようなイメージがあるかもしれませんが、そういうことではなくて、小、中、高校の授業を見ると、デジタルがあることで隣の人や周りの人と話や議論をして、自分で課題を決め、その材料を集めて来るとかですね、それをプレゼンテーションでお互い議論をし合うといった1つのきっかけとして使えることがよく分かってきました。

ゲームをして一人で遊ぶというのも、それはそれでよいのでしょうけれども、授業の中でうまくデジタルやタブレットを活用することによって、中々そこに行って体験できないようなことも、デジタルを通して世界を含めて、色々なことを知る体験ができるというプラスもあります。

もちろん、フェイスツーフェイスで、陣内委員が仰っているように、地元の企業に行くことはそれはそれで大切ですが、それだけに限らないタブレットの様々な活用の中で、社会の多様性であるとか価値観の多様性であるとか、そういったものに触れるということも可能なのかなということ。是非、今の時代、その三年間を踏まえて、次はやはりこういったものをいかに有効に効果的に活用して行くかということが、大きなテーマになってくるかなと、子供たちの自分の生き方の目線を広げる、視野を広げるという意味では、こういう部分もあるかなと思ひまして、是非タブレットの活用はこれからも積極的に進めていきたいと考えております。

以上です。

○福田知事 それでは、「自分の生き方を考える教育の充実」について、委員の皆様からご意見をいただきました。

私自身のことを考えてみても、自分の未来を考えるにあたっては、時代の壁、あるいは環境の壁、そういうものがあって、その壁が乗り越えられないが故に、自分の未来がもっと描けていたかもしれないけれども、そこで止まってしまうこともあったかもしれません。

例えば農業、昭和40年頃の農業は、米を作るしかなかったが、だんだんお米に魅力がなくなってきて、農家の長男は農業高校に行くのを諦めて別の学校に行くというようになってきました。

その頃は、体験学習などなかったのですが、しかし今のように、輸出も絡む、企業的経営もできる、園芸も畜産も意欲をもって取り組めるという時代であれば、私も思うように昭和40年代に始めていたかもしれません。そういった時代の壁があります。

一方で環境については、これは先程、永島委員から小さな夢だから私は言えないという話がありましたが、その人にとって小さいか、周りから見て小さいかどうかで、その人にとっては小さいかもしれませんが、それはやはり聞いてみないとわからないのですが、育ってきた環境があって、考えたことを公の場で発したくないという思いがあったかどうかは分かりませんが、経済的に学ぶ機会が少ない、体験をする機会が少ないなど、所得の格差が体験学習の格差にも繋がっていると考えられますので、そういった意味ではお金のない人は体験をする機会が学校以外にはないという状況になっています。すなわちこの環境の壁で自分の未来が描けないといったことを、学校現場で壁を壊して前に進むことを、私たちは検討していかなくてはならないと考えています。

そこで、学校の役割は、普通高校であっても 大学を選ぶときに理工系に行くのか文系に行く

のか芸術系に行くのか、そこでコースの選択をしなくてはならないので、高校の時に体験学習をしていた方が、自分に合っている合っていない、あるいは将来性、人との関わりの中で、ああいふ先輩みたいな、ああいふ社長みたいな人になりたいとか、ということ自分で考えることで、自分のコースの選択がより絞られてくると思います。それをやらないで行くと、結果として自分の目指したものと違うということで、回り道をすることがあります。回り道は悪いことではないのですが、出来ることならしない方がいいと思いますので、そういう点では、体験学習などは、将来自分の夢を描くにあたっては非常に重要だと思います。

教育長、職業は世の中にどのくらいありますか。

○阿久澤教育長 沢山あり、どんどん新しい職業が生まれてくると思います。時代と共に、数が変わっていくのではないのでしょうか。

○福田知事 私は先生に、その無限大の職業を全部子供に教えてもらいたいと思っています。可能なのであれば。

その職業選択の広いところから、自分は何がいいかというのを選べるのが一番理想なので、食堂で言えばメニューを提供するのが先生であり、学校だと思えます。その中から選ぶのは、児童生徒だと思うので、そのメニューが多ければ多いほど自分の未来を描くことは可能だろうと思います。

そのメニューを出す先生がどれだけいるかということが子供の職業選択や進路に大きく影響していると思っています。その先生を補うのがタブレットだと思えます。そこでも発見してもらい、そして自分の未来を描いてもらいたいというふうに思っていますので、「自分の生き方を考える教育の充実」については、普通高校でも職業高校でも特別支援学校でも、どの学校の子供たちも色々な体験をしながら、さらにはタブレットで補足しながら、進路選択をして、回り道をしてもいいが、一直線にいけるのが一番いいので、そういうことを学校として手助けをしてほしいと思っています。本日の委員の皆様の意見を反映できる仕組みを考えていきたいと思っています。

では次に「施策の方向9 高度な知識・技術、多様な文化に触れる教育の充実」についてでございます。

これもまた、それぞれの立場でご意見をお願いしたいと思います。

鈴木委員、お願いします。

○鈴木委員 ここ数年の高校の入学選抜で人気の高い高校として宇都宮北高校が際立っているのですが、国際理解教育を推進しているということが人気の理由の1つかと思います。

海外に目を向ける若者は、一時期落ち込んだのですが、ここのところまた増えていると思います。最近若者たちの間でワーキングホリデーが注目されています。円安の時代なので海外で短期間で収入を得ようとする若者が増えています。オーストラリアが人気のようですが、若い人たちに国際的な視野やチャレンジ精神は、私たちが思っている以上に若い皆さんにあるのかなと思っています。

そして、グローバル化に対応できる人材になるための学びを子供たちが求めているのではないかと考えられます。

そして、ワーキングホリデー等で、海外で仕事をした若者が、日本、栃木に帰ってきて、栃木で新しい風を吹かせてくれることがとても楽しみだなと考えます。

先程も申し上げましたが、コロナで体験できなかったことが、規制が終わり、子供たちが体験

できるチャンスがたくさんあるので、準備する大人は大変だと思いますが、存分に体験できるように、大人が力を合わせて体験させてあげられたら良いのではないかと考えております。

私からは以上です。

○福田知事 ワーキングホリデーというのは高校生も行けるのですか。

○鈴木委員 高校生は行けません。

○福田知事 高校生の留学枠はあるのですか。

○事務局 高校生の短期留学事業ということで、県で補助を出して、学校が海外に行っております。

○福田知事 どのくらいの学校が行っていますか。

○事務局 現在は十数校程度かと思いますが、行き先は アメリカやカナダ、アジアなど様々です。

○福田知事 先日フランス大使館から、高校生や大学生の農業関係の交流がしたいという提案を受けて、教育委員会が調べたと思うけれども、そういう申し出が大使館を通じて、各国から少しずつ来るようになりましたので、課題もあるのだけれども、交流ができるようになったらいいなと思います。

一方で、学校間での留学生を活用してもらい仕組みが必要なのかと思います。

それでは金子委員、永島委員、板橋委員の順にお願いします。

○金子委員 私の方からは、この「高度な知識・技術」ということで考えたのですが、何と云ってもここ数年、チャット GPT などに代表されるような生成 AI の進歩が非常に速く、我々民間もアカウントを取って使えるような環境になっています。

私も AI に関連する本を読み、勉強させていただいていますが、これからの時代の中で、やはり色々と職場への影響、雇用に対する影響が多分大きく変わってくるだろうと思います。

そういった中では、学校で子供たちが、どういった技術を身につけなければいけないのかということが当然出てきます。やはり Society5.0 社会を実現しようというようなところで、学生とか子どもの頃からこの AI とどうやって付き合っていくのかというのは非常に重要だと思っています。

文部科学省のガイドラインなども色々読んでいますが、この雇用に対する影響で果たしてどんなのがあるのかなと思い、ネットで調べれば、色々数値が出てくるのですが、経済協力開発機構 OECD が、7月11日に公表した数値で2023年雇用見通しというのが、偶々タイムリーに出ています。加盟38カ国の平均労働人口の約27%が自動化の仕事において影響を受けるということが、ロイター通信のニュースで出ていました。こういった数値は、世界的にも注目を浴びて、今本当にホットな話題なのだなと思っています。

では、子供たちがこれからの AI と共存して行くためにはどういう学びをしなければいけないのだろうというところが非常に重要なのだろうと思い、やはりデジタルというと、どちらかというと引きこもりで、一人で、というような悪いイメージが前にはあったかもしれませんが、これが開かれた中で、どうやって多くの方とつながりが持てるのかとか、自分の能力以上の情報を得て、それを活かしていけるのかとか、色々可能性はあるのだなと思って見させていただきました。

これからの教育の中で、STEAM教育や英語、国際など色々あると思うのですが、やはり生成 AI を入れるのであれば、技術的なスキル、AI を活用できるような能力であったり、AI には創造性や倫理など感情というものはありませんから、逆にそこは人間性の良いところで、人間

としては創造性、新しいアイデアであったり、問題を解決する能力というのを、もっともっと身につけなければならないのだろうと思います。

あとは、大きく時代が変わっていくことに取り残されることのないような、迅速に対応できる、適用できる能力を身につけなければならないだろうと思っています。

最終的には、人間としての倫理や、コミュニケーションスキルなどが最も重要視されると思います。いわゆる感情的知性、社会的知性といったキーワードもありますから、そういった知性を身につけて、どうやってこれからのA Iと共存して、よりよい住みやすい世界を作るのかなということが、これから中心になるんだろうと思います。

記事の中には、これからはA Iが我々にどのような影響を与えるのか、また恩恵とリスクのどちらが上回るのかというのは、これからの我々が取る政策行動にかかっており、政府は労働者また人間が変化に備えて利益を受けられるように支援をしなければいけないというようなことを要請、国としての方向性なども色々と指摘をしています。ある本に、A Iが書いたA Iについての本というのがありまして、教育の問題点というのがいくつも書いてありました。そこに何故か、今の教育システムは標準化されたテストや丸暗記に重点を置いている、そういった決まりきった教育だけではダメだということで、中国と日本という名前が入っていたのが衝撃的でした。これからの日本においても、教育の部分については、色々と考えながら、先程の施策5のテーマにも関係しますが、地域や人とのコミュニケーションであったり、地域の意識や倫理観など、そういったものも重要だと考えました。そういった学びは、これからますます必要になってくるのではないかと思います。

以上です

- 福田知事 本の中の、教育の問題点というところで印象に残ったところがありますか。
- 金子委員 教育システムが標準化されたことで成果を上げてきたところがあるが、これからA Iが進化する中においては、創造性であったり、適用性であったり、感情的知性といったものをいかに高めていくのが必要だろうということが、書かれていました。
- 福田知事 使われるのではなく、使えということですね。
- 金子委員 そういうことだと思います。
- 福田知事 では、永島委員
- 永島委員 S T E A M教育について先程御説明いただきましたが、県立高校4校がモデル校ということをお聞きしました。

S T E A M教育で探究型学習が進み、問題発見、問題を捉えて子供たち自身が解決に活かすというような日常の授業の中でできれば、子供たちが新しい時代を豊かに生きられると思います。その豊かというところがポイントだと思うのですが、子供たちが、自分の力で豊かに生きてくれるのではないかと思います。

学習指導要領の中にも、主体的で対話的で深い学びというのが何度も出てくるのですけれども、子供たちが自分で考えてそれを解決しようとする、自分の力で答えを導こうとするというのは、今後とても重要になってくるのではないかと思います。今は高校生へのモデル事業ということなのですが、今後、小学生、中学生にも、答えは1つではなくて、多角的にものごとを捉えたり、答えはいくつもあるということをも自分から導き出せるという授業が広がることは意味があるのではないかと思います。教育長からI C Tの活用という話がありましたが、S T E A M教育でも、専門的な講師にオンライン授業で話していただくことを聞くことで、子供たちの知

的欲求が本当に開拓されたり、満たされたりするというところもあると思いますので、これからのAI時代を自ら生き抜いていく子供たちに、栃木の教育が一端になれば素晴らしいなと思っています。

GIGAスクール構想で、一人一台のタブレットになっておりますけれども、その辺りも、先程キャリア教育のところでも話をさせていただきましたが、教育に力を入れている自治体、そうでない自治体、私立公立、家庭環境の違いにより、体験の格差が生まれてしまうところであると思うのです。GIGAスクール構想が進み、デジタルが活用できているからこそ、中々会えない方の話が聞けたり、世界が広がっていくと思うので、そのあたりの格差がなくなってくるといいなと思います。先生方にとっても、新しいものを教えたり、新しい教材を取り入れたりするという変革がとても求められると思います。口で言うのは簡単だと思いますが、興味を持つ子とそうでない子もいると思うので、それぞれの取組に合わせて、学びの場を提供するのは大変なことだと思うので、先生方を支えていけるような仕組みも必要なのかなと思いました。

先日、副理事長が、高校生だからできる社会貢献活動という題で、県立高校のオンライン授業の講師を私の隣の席でしていました。こちらの画面を共有してくださいと呼びかけたのですが、5分ぐらい共有できないことがありました。同じような内容を那須塩原市で行いましたら、那須塩原市は問題がなかったということを知ったので、格差があるのかなと感じた次第です。

以上です。

○福田知事 情報環境の格差、体験学習の格差をAIやデジタル、STEAM教育で埋めることが可能ではないかという話がありました。

では、板橋委員をお願いします。

○板橋委員 先程と同じように、色々な取組をされていますので、展開をさせていただきたいと思います。今回の高校再編で、学悠館高校のような学校を増やしていくという方向性を示していただいたところです。教育委員会でも学悠館高校は面白いねという話は出ていたかと思うので、そういった学校が増えていくのは嬉しいことだなと思いました。

3点ほど考えを話しますが、無駄なカリキュラムを増やしてもらいたいということが一つございまして、これもまた地元の高校の例であまり言いたくないのですが、私はロータリークラブに所属しております。今年、台湾の女子高校生が足利に来るというようなことで、某県立高校に受け入れをお願いしました。そうしたところ、申し訳ないけど、今、交換学生を受け入れる余裕はないと、受験勉強等忙しいので、残念ながら交換学生が学校に来て、嫌な思いをさせてしまうのではないだろうかという理由で、残念ながらその学校に受け入れてもらうことができませんでした。

一方で、ここに書かれているとおり「国際的視野やチャレンジ精神の涵養」という目標があるにも関わらず、交換学生を受け入れるというのは非常に大きなチャンスであるのに、それができない、ということで、そういったものが学べるようなカリキュラムが必要なのではないかなと思いました。

ICTをどんどん活用するに当たって、最近雑誌で見ると、若い人たちが映画などを2倍速にして見ているという話が出ています。情報を追うというのは、1つの利用の仕方だと思うのですが、さっき金子委員がおっしゃったような、本当にそこからAIを超えたような理性というものは、もしかしたらきちんと普通の倍速で見て、色々なことを感じながら学んでいかないと身につかないのかなという感じがします。

抽象的な言い方になってしまいますが、もう少し無駄も取り入れたようなカリキュラムが必要なのではないかなと思います。

2番目としては、モチベーションを上げるというステップにも時間を裂いてもらいたいと思います。

これは職業高校の例ですけれども、農業高校に行かせていただいて、農業体験だったり畜産だったり、色々なカリキュラムがあつて、本当に素晴らしいなと思っていたのですが、実際に生徒さんと話をしてみたところ、その生徒さんも非常にぎっくばらんな生徒さんだったと思うんですけども、「いいですね、こういう色々な事が出来て」とお伝えしたら、「いえ、私はたまたま成績が低くて、この学校しか受からなかったのので来ました」という言い方でした。

もちろん、そういう学生さんだけではないと思うのですが、色々な価値観があつて、学校でやっていることは面白いんだよという、授業に入る前段のカリキュラムをもっと充実させると、実際にある施設が利用できるのかなと思います。

最後ですが、皆さんもおっしゃっていましたが、企業といろいろな地域を利用するという意味では、協力というようなことですね、今企業もSDGsなどで社会貢献しなくてはいけないと言われていまして、企業から基金のような形でお金を集めて、こういった施設であつたり留学に利用するなどには率先してやっていただいてもよいのではないかと思います。

留学先では、知事もベトナムとの色々なプロジェクトを進めてらっしゃると思いますが、ベトナムとの高校生の交換留学に関して、双方の国にとって面白いきっかけになるといいますので、企業をうまく利用しながら進めていただけたらいいと思います。

以上です。

○福田知事 ありがとうございます。

留学制度を拡充させるために企業に応援を求めたらいかがか、ということ、それから、子供たちのモチベーションを高める、あるいはグローバル人材の育成のチャンスが、例えば交換学生では、残念ながら学校に遊びがないから対応ができないということはもったいないですね、という御指摘をいただきました。

それでは、教育長お願いします。

○阿久澤教育長 はい、それでは陣内委員の意見になりますけれども、本県には大学に加えて、多くの先端企業、大きな企業、研究所などもたくさんあります。

高校の生徒が学んでいく中であつては、小、中、高を通してですけれども、そういった地元にある大学や企業と連携して行くということがとても重要だと言うような記載があります。

そして、それを行っていく上では、どうしても研究というと理系の分野と思われがちですけれども、人文系の中にも、今、研究はいたる所で行われているということで理系に限定せず文理融合、文理横断の考え方のもとに、こういった先端の技術に触れていくと言うことが大切ではないかと言うことでありました。

また、海外の研修など、そういったものも積極的に受け入れることで、子供たちの視野も広がっていくという中で、モチベーションの話が、今ありましたけれども、自己肯定感、動機づけ、こういったものをしっかりと自己目的を持つ機会づくりなどに、そういう体験がつながっていくので、そういったことをさらに進めていく必要があるのではないかなというのが、陣内委員からいただいたものであります。

それでは、私の方から話をさせていただきますけれども、先程知事からの話があつて、職業は

これからどうなるのかという話の中でよく言われているのが、職業はどんどん時代が変わって行く中で、AIやコンピューターに、例えば入店にしても何にしても機械化、オートメーション化できるものは置き換えられていくだろうと思われまます。この10年、20年、30年の内に、主要な仕事の三割とか何割とかは、なくなっていくのではないかとされているようです。

そういった中で、やはりこれから次の時代を生きて行く子供が、どういう能力を持つことが大切なのか、そうなることや、基礎、基本というのはいつの時代にも必要なのですが、基礎、基本に応用力であるとか、発想力であるとか、さらに言えば感性みたいな部分であるとか、そういったものを持てるような教育が求められてくるのだろうと思います。

その中でも、これまで専門性を伸ばしていく、ある意味縦の部分の部分を伸ばしていくというように力を入れてきましたが、今回の高校再編の中でも、職業系専門高校につきましては横の繋がりをつけていく、農業、工業、商業という縦の視点でありながらも横の繋がりをつけるというのは一つの今回テーマにしていますが、そういった縦と横のバランスをどう取っていくのか、ここはやはり、これからの重要なテーマになってくるのかなと思います。そういった意味で、複雑多様化する時代になりますけれども、子供たちが真に求められる力をどうつけていくのか、その辺は大切な検討課題になってくると思います。

資料の中にもありますけれども、先般、「とちぎ子どもの未来創造大学」の開校式を行ったのですが、子供から色々質問も出たりして、今の子供はすごいなと思いましたが、この事業を始めたのは平成26年ですが、その頃知事から宿題をいただいて、本物に触れることが大切だということで、この事業を作ってきたという経過があります。子供たちに今言った地元の企業や大学や様々なところが、今の大人が取り組んでいる本物の社会を見せていくというのが、先程の部分に戻る部分もあるかもしれませんが、モチベーションに繋がったり、選択肢に繋がっていくと思います。STEAM教育などはこれからどんどん進めていくということになりますので、ぜひそういったものを総合的に活用しながら、学びの多様化と、学びの広がりや深さの両面をバランスよくできるように、取り組んでいきたいと思っております。

以上です。

○福田知事 ありがとうございます。

様々なご意見をいただきまして、ありがとうございます。

今「てつたび」というのがあって、お手伝いをしながら旅をするというのが流行ってきていて、お手伝いをしながらその家に泊まるかどうかそこは分かりませんが、費用を安く抑えて、色々な体験をしながら地域と触れ合うことができるというものです。

少し趣旨が違うかもしれませんが、話が出ましたワーキングホリデーなど、色々な学びの場、あるいは自分自身を高める場というのは、挑戦すれば選べるという時代になっていますので、そういった留学制度の拡充なども含めてグローバルな人材を育てていくという観点からも必要なことだと思います。

合わせてデジタル技術は高くなるので、スキルアップと倫理観などを学んでいくこと、そして、子供たちの知的欲求を満たしてあげたり、あるいは体験格差を解消するツールとしてデジタル技術を活用していくということがあります。留学制度については、企業も応援しますよと言う暖かいご意見をいただきましたので、ぜひ多くの方が、海外で学べるような仕組みを、あるいは受け入れると送り出す両方の分野で企業の力を借りながら充実させていくことについてももっと県としても考えていくべきではないかと思っております。



また、自己肯定感、動機付けを高めていくことが重要だということですが、それは、海外研修や交流体験が必要だという話がありました。

さらには、基礎、基本、あるいは応用する力、感性を高めるといった原点、人としての基礎、土台の部分ですが、これを重要視していきながら新たなものも吸収し、心豊かな児童生徒を育てるという話を皆様からいただきました。ありがとうございます。

最後に私から申し上げますが、メニューをいっぱい提供してほしいと話しましたが、そこから挑戦する力が湧いてくるのですね。

こういうことが最近あって、皆さんも既にテレビなどで御存知だと思うのですが、甲子園の東京大会で、都立の青鳥特別支援学校の久保田先生、57歳ですけれども、創部したばかりの野球部を率いて、都立深沢高、松蔭大付属松蔭高、3校の合同チームで特別支援学校の生徒が大会に出場したということが、ニュースなどで取り上げられ、私も見ました。この先生は57歳ですけど、特別支援学校の先生になって36年目で、宿願がかなったと。日体大で野球の選手であったわけですが、高校の監督になり、東京大会で甲子園を目指したいというところで、特別支援学校の先生になりました。

学校にいたくなく、中学校へ行きたいという転勤願いを出そうとしたら、転機が訪れたと。

特別支援学校の子供が、先生、キャッチボールを教えてよと、言ったことが転機だったそうです。無理でしょうと思ったけれども、投げ方を教えたところ、面白いように距離が伸びて、その日のうちに30mまでキャッチボールができるようになったと。そして生徒の顔が誇らしげに輝いていたと。やればできるんじゃないかというのを確信して、この先生は赴任先のソフトボール部を有数の強豪にしながら、硬式野球への参戦の機会をうかがってきたということです。知的障害者には野球は無理だ、危ない、という先入観に、硬式野球の前例がないという学校側の姿勢で、残念ながら甲子園のチャレンジをずっと閉ざされてきて、壁は厚いと。野球部創設を訴えては却下され、その繰り返しだがめげずに、事故防止に配慮した練習計画を何枚もリポート用紙にまとめて訴え続けたところ、熱意を理解する校長が現れて、創部、高野連加盟、そして都立松原と10日の試合に臨むことになったと。10点取られたけど、すぐ10点を取り返し、19対23で負けたのだけれど、仲間と一つ一つのことをやりきったことが社会に出たときに自信になればと、久保田監督が話していましたというのが、今日の日経新聞に紹介されていました。

諦めさえしなければ何事もなせると、これを示した先生の歩み、そして生徒たちの道しるべになったということで、締めくくっているのですけれども、そんなのダメだよ、無理だよという最初から否定してしまう、諦める気持ち、やってみなければわからない、やったらできたという、この特別支援学校の選手は7、8人だったということですが、この子供にとっては最高の財産を、この甲子園大会一体となって望んで、19対23というのは接戦だと思いますが、やればできるという思いを持ってこれからこの子供たちは色んなものに挑戦して行く力を、野球を通してもらったんじゃないかと思っています。

ついては、学校の役割とはこういうことで、駄目じゃないの、無理じゃないのっていうことをやり遂げていくことが非常に重要で、そこに新しいエネルギーが生まれて、子供たちが大きく育っていき、そして夢を語るとか、夢を持つとかいうことになっていくのだと思いますので、挑戦させることをどんどん行って、このとちぎの未来の教育の中での「高度な知識・技術、多様な文化に触れる教育の充実」をぜひ行ってほしいと思います。これは、子供の求める力、挑戦する力を受け止めることが重要だと思いますので、よろしく願いいたします。

次回の内容ですが、今回の議論を踏まえ、同じテーマで更に意見交換をすることで議論を深めていきたいと思えます。

次回の会議は10月30日(月曜日)を予定していますが、詳細については、後日、事務局から御連絡します。では、以上で協議を終了します。

#### 4. 閉会

○事務局 以上をもちまして、令和5年度第1回栃木県総合教育会議を閉会いたします。

本日はありがとうございました。